

(メッセ海外通信 2007年10→12月号掲載記事)

～復活した関釜親善陸上競技大会～

下関市総合政策部国際課
(釜山広域市派遣職員)
久保 伸子

■大会の復活

去る7月22日、下関市の姉妹都市・釜山広域市で、11年ぶりの関釜親善陸上大会が開催されました。同大会は、現在の関釜フェリー就航(1970年)の翌年から毎年、下関と釜山交替で開催されていたのですが、韓国の経済危機などの理由により、1996年の下関大会を最後に途絶えていました。しかし、その後も交流が続いていた釜山市陸上競技連盟と下関市陸上競技協会との努力により、このたび復活したものです。

下関からは選手として高校生32人、役員8人の計40人が参加。競技当日は、途中降ったあいにくの雨にもかかわらず、選手達は男女合わせて21種目の競技を競いました。競技の合間には、片言の英語やジェスチャーで互いにコミュニケーションを図る場面も見られました。



2007関釜陸上競技大会 (2007年7月、釜山・九徳運動場)

■『チルソクの夏』

2003年の映画『チルソクの夏』（佐々部清監督）は、関釜親善陸上競技大会を舞台に、そこで出会った下関の女子高校生と韓国・釜山の男子高校生の淡い恋を描いた作品です。ロケもすべて下関と釜山で行われました。チルソクとは韓国語で七夕のことで、携帯電話もEメールもない1970年代、1年に1度しか会えない二人が、手紙のやりとりで心を通わす、胸がキュンとなる物語です。この映画を観た、かつての陸上大会関係者の間から復活を望む声も多く上がり、今回の大会開催の後押しをすることになったといえます。

『チルソクの夏』には下関市陸上競技協会の皆さんや下関市の江島市長も出演しています。大会の復活は、映画に関わった皆さんにとって感慨またひとしおといったところでしょう。ちなみに私もエキストラとして下関市陸上競技場のスタンドに座っていたのですが、残念ながら映画では顔も認識できない‘点’でしかありませんでした。ただ、自らも少し関わった映画として、故郷・下関と第2の故郷・釜山両方が舞台の映画として『チルソクの夏』は特別な存在になっています。また今回、映画同様に復活した大会を直接見られたのは本当に幸いでした。

■草の根交流

下関、釜山の両都市間には、親善陸上競技大会に限らず、各種のスポーツ交流、文化交流、学校間の交流などがあります。姉妹都市の締結は1976年のことですが、それ以前からの交流が続いている民間団体がいくつもあります。

今回の親善陸上競技大会で、釜山側の事務局の方が「久しぶりの大会で心配だったけれど、下関の役員も皆知っている方ばかりで、とても安心したし嬉しかった」と話していました。団体同士の交流も、結局は人と人との交流なのだと実感しました。交流を長く続けるには互いの熱意が必要ですが、互いに知り合い友人になれば、継続のエネルギーもまた得られるのでしょうか。来年は下関で開催されるという同大会。今後は途切れることなく、ずっと続いていってくれるものと思います。